

「元朝秘史」渡来のころ

—日本における「東洋史学」の開始とヨーロッパ東洋学、清朝「辺疆史地学」との交差—

中 見 立 夫*

I. はじめに、本稿の目的

近代的な科学の体系は、おおむね19世紀後半以降の時期に、西ヨーロッパから渡来し、日本ついで中国において受容された。ただし日本でも中国でも、とくに人文科学の場合、ヨーロッパ流の学問体系をすべて丸のまま、受け入れた訳ではなく、在来の学問の系譜も加味して修正し、あらたな学術領域を形成した。近代的な歴史学は西ヨーロッパで成立したが、すくなくとも20世紀前半まで、その「歴史学」が直接の研究対象としたのは、ヨーロッパ文明に関する研究であって、アジア地域の歴史に対する研究は除外されていた。アジアについての歴史研究は「東洋学/Oriental Studies」という枠組みのなかでおこなわれていた。西ヨーロッパあるいはロシア帝国における「東洋学」とは、アジア諸地域の言語文化をおもに文献学 [Philology] 的方法で検証するものであった。したがって方法論別、たとえば歴史学、言語学、宗教学という区分ではなく、言語あるいは地域別に、「エジプト学/Egyptology」、「インド学/Indology」、「シナ学/Sinology」、「日本学/Japanology」、「モンゴル学/Mongolistik」というように分けられ、それを総称して「東洋学」と呼んだ。

近代科学を東アジア諸国のなかで最初に本格的に取り入れたのは日本である。しかし日本は地理的にも文化的にも「東洋/the Orient」に属する国家であった。それゆえにヨーロッパ流の「東洋学」をそのまま受け入れる訳にはいかなかった。今日に至るまで日本において設立された大学・高等教育研究機関のなかに、ひとつとして欧米諸国でみられるような「東洋学科/Department of Oriental Studies」という名の学科が存在しないことに、この事実は現れている。日本人は、19世紀の末から20世紀のはじめに、ヨーロッパの歴史学方法論にもとづき、日本在来の「漢学」、ヨーロッパ式「東洋学」そして清朝考証学も加えて、当時の世界には存在しなかった「東洋史学」という新たな学問領域を作りだした¹⁾。その日本人が考案した「東洋

* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授、財団法人東洋文庫兼任研究員

1) 日本における「東洋史学」の成立、あるいは日本的「東洋学」の特質に関しては、拙稿「日本の“東洋学”の形成と構図」『「帝国」日本の学知、第3巻：東洋学の磁場』（岩波書店、2006年）、13-54頁、および同「日本の東洋史学黎明期における史料への探求」、神田信夫先生古稀記念論集編纂委員会編『神田信

史学」という研究分野において、最初にだされた本格的な学術成果はなにかといえば、那珂通世による『成吉思汗實録』、つまり「元朝秘史」の日本語訳注²⁾であろう。またそれは世界最初の、モンゴル語原テキストからの外国語訳でもあった。

今回のICIS第2回国際シンポジウム「文化交渉学の構築 I — ‘西学東漸’ と東アジアにおける近代学術の形成—」では、「グローバルな文化交渉の一例として、ウェスタン・インパクト以後の東西両世界における近代学術の形成」をテーマとして取りあげた。シンポジウム企画組織者は「東アジアにおける近代学術の形成」には、二つの側面、すなわち「西の学問との接触によって新たに形成が促進された側面」と「そのように形成された学術が伝統的学術と接合・融合していった側面」があったと考える。さらに「東西両世界の接触は、東に近代学術の形成をもたらしただけでなく、西の学術にも何らかのリバウンドを引き起こしたこと」を想定している。

「元朝秘史」は、モンゴル語で書かれた文献のなかにあって、多くの言語に翻訳され、ウイグル字モンゴル語、キリル字モンゴル語でも翻字され、研究者のみならず、一般読書人にまでもその名が知られている、唯一のモンゴル語文献といっても過言ではない。さらに同書に関する学術業績は多数で、国際研究集会は何度も開かれている。本稿は、その「元朝秘史」自体の研究に対して、あらたな学問的寄与を試みるものではない。編纂されて以降、久しく識者の関心をひくことのなかった「元朝秘史」がどのように「再発見」されたか、ついで「東洋史学」黎明期の日本人学者は、なぜに「元朝秘史」へ注目し研究に取り組み、前述したように当該学術分野における最初の本格的な研究成果として、「元朝秘史」の日本語訳注が刊行されたか。その経緯と、「元朝秘史」をめぐる、おもに日中間学者間の交流を跡づけることは、本シンポジウムの課題解明へ示唆をあたえてくれるであろう。

II. ヨーロッパにおける「モンゴル学」の誕生と、 清朝での「西北史地の学」の発展

バルトリド [В. В. Балтольд] の『ヨーロッパおよびロシアにおける東洋研究史』によれば、ヨーロッパで「モンゴル学」が開始されたのは、1828年、ロシア帝国のカザン大学で、モンゴル語講座が設置されたことにはじまるという³⁾。ロシア国内にもモンゴル系住民がふくまれ

夫先生古稀記念論集：清朝と東アジア』（山川出版社、1992年）、97-126頁、を参照されたい。

2) 同書初版表紙には、「元の太祖太宗の時、漠北の文臣無名氏撰りたるを、日本明治三十九年、盛岡の那珂通世訳して注したる」と書かれている、那珂通世訳注『成吉思汗實録』（大日本印刷株式会社、明治40年）。同那珂訳注本に関しては、原山煌「『成吉思汗實録』雑記」『桃山学院大学総合研究所紀要』第27巻第3号（2002年3月）、265-272頁を参照。

3) Балтольд, В. В., *История изучения Востока в Европе и России* [Академик В. В. Балтольд, *Сочинения* том IX], (Москва: Издательство «Наука», 1977), стр. 452-453. 同書初刊は1911年、第二

ており、ロシアと東アジアとの接触、そしてロシアによる東アジアへの進出が、清朝の支配のもとにあったモンゴルを経由しておこなわれていたことをおもえば、これは当然の措置であった。このような状況のもと、ロシア帝国科学アカデミー会員、シュミット [Яков И. Шмидт / Isaac Jacob Schmidt] は、29年にモンゴル語年代記「蒙古源流 / Erdeni-yin tobči」のモンゴル文テキストとドイツ語訳注⁴⁾を出版し、ついで31年にモンゴル語文法書⁵⁾、さらに35年にはモンゴル語 = ドイツ語 = ロシア語辞典⁶⁾を編纂している。一方、ドーソン [Constantin Mouradzea d'Ohsson] は、西アジア史料にもとづきモンゴル帝国の歴史を、1834年から35年に刊行している⁷⁾。このようにして、1820年代から30年代にかけて、ヨーロッパにおいては、モンゴル（文献）学、あるいはモンゴル帝国史研究が、本格的にはじまった。

これに対し同時期、清朝統治下の中国では、「西北史地の学」と呼ばれた、「塞外」ないしは清朝「辺疆」の歴史地理に関する研究が発展していた。内藤湖南は、この「西北史地の学」について「乾隆以降の史学の各分科中、清朝の末年まで引続き最も著しい発達をし、且つ最も学者が精力を集中した」領域、と高く評価している。その原因として内藤は、清朝の版図が拡大し、その領域内に「塞外地方を包括するやうになつた関係」をあげ、「各種の民族を包有することとなり、種々の異なつた言語や風俗等が段々知られて来て、それらの比較研究を必要とするに到つた」との事情を指摘している⁸⁾。

元朝史関係方面では、まず銭大昕が「元朝秘史」、「聖武親征録」、「元典章」などの史料にはじめて注目し、「元史」の考証をおこない、ついで魏源、張穆、何秋濤などがつづいた。「西北史地の学」は清朝の末年に、内藤によれば、文人官僚で「宗室盛昱の門に出入した人達」、具体的には、文廷式、李文田、沈曾植、そして洪鈞などが輩出することによって、さらに一層の発展をみせるが、その背景にはヨーロッパ列強の進出に対する、清朝側からの「辺疆史地」に対する関心の高まりがあった⁹⁾。

版は1925年刊行。第二版からの日本語訳として、外務省調査部訳『欧洲殊に露西亞に於ける東洋研究史』（生活社、昭和14年）がある。

4) *Geschichte der Ost-Mongolen und ihres fürstenhauses, verfasst von Ssanang Ssetsen Chungtaidschi der Ordus* (St. Petersburg, 1829) .

5) *Grammatik der mongolischen Sprache* (St.-Petersburg, 1831).

6) *Mongolisch-Deutsch-Russisches Wörterbuch: nebst einem deutschen und einem russischen Wortregister* (St. Petersburg, 1835).

7) Constantin Mouradzea d'Ohsson, *L'histoire des Mongols: depuis Tchinguiz-Khan jusqu'a Timour Bey ou Tamerlan* (La Haye & Amsterdam, 1834-35). 同書日本語訳として、はじめ田中萃一郎が部分訳、『蒙古史』（富山房、明治42年）をだしたのち、佐口透による全巻訳注本、『モンゴル帝国史』（平凡社《東洋文庫》、1968-79年）が刊行されている。那珂通世訳注『成吉思汗實録』刊行（1907年）とはほぼ前後して、田中萃一郎訳、ドーソンの著作日本語部分訳が出版（1909年）されていることへも注目されたい。

8) 内藤湖南「西北地理の学 一」、『内藤湖南全集』第11巻 [支那史学史]（筑摩書房、昭和44年【初刊は昭和24年】）、397頁。

9) 李治安、王曉欣編『元史学概説』（天津教育出版社、1989年）、17頁；内藤湖南、前掲「西北地理の学

この時期、外交官としてドイツ、ロシアに駐在した洪鈞は、前記ドーソンやハワース [Henry H. Howorth] などのヨーロッパ人の著作から、ラシード・ウッディーン [Rashīd al-Dīn] の『集史/Jāmi' al-Tavārikh』の存在も知り、ドイツ人宣教師、クレイヤー [Carl Traugott Kreyer/金楷理]¹⁰⁾の助力をえて、ベレジン [И. Н. Березин] によるロシア語訳『集史』をも参照しつつ、『元史訳文證補』を執筆した。洪鈞は1892年に帰国し、総理各国事務衙門大臣に就任したが、その生前に『元史訳文證補』は刊行されることなく、「蒙古源流」漢語版の校訂 (『蒙古源流箋證』) をおこなった沈曾植により、1897年に出版された。内藤湖南は洪鈞の著作を、中国と日本の「蒙古史研究に一つの時期を画した名著」と評価している。清朝治下における「西北史地の学」の発展という状況のなかで、「元史」に対し文人官僚たちが関心を抱いた背景には、「元史」に対する評価、つまり「元史」が元朝の後継王朝、明朝により短期間のあいだで、杜撰に編纂されたとの認識があり、これを改訂しようとの意図がみられる。

Ⅲ. 「元朝秘史」とは

「元朝秘史」¹¹⁾は、現在のモンゴル史研究における史料評価では、チンギス・ハーン一門の事績を正確に記録した「史書」というよりは、「歴史文学」とみなされている。村上正二は、「このモンゴル古典の内容を一言で言うなら、十二、三世の交におけるモンゴル民族の勃興期に当たって、民族統一の業を成し遂げた英雄チンギス・カンの生涯を中心に、モンゴル帝国成立の歴史を物語った歴史文学だと定義してもよいであろう」¹²⁾とする。だが森川哲雄は「【編纂】当時のモンゴル人、特にチンギス・ハーン家や貴族たちにとって『元朝秘史』がどのような意味を持っていたのか、という点を考慮した場合、そこに記されている記述を、単純に現在の歴史研究方法論から批判するだけでは意味がなかろう」¹³⁾と説く。

同書の成立年代については諸説があるが13世紀前半と考えられ、原本はウイグル字モンゴル語で書かれていたとする説が有力ではあるものの、パスバ字モンゴル語でしるされていたとの

二」、411-414頁。

10) 高田時雄「金楷理伝略」『日本東洋学』第一輯 (2007年)、260-276頁。

11) 「元朝秘史」に関する、日本語による解題としては、那珂通世が『成吉思汗實録』の巻頭部分「成吉思汗實録の序論」(同書、1-100頁)で論じた。第二次世界大戦後では、小林高四郎『元朝秘史の研究』(日本学術振興会、1954年)が最も詳細。村上正二訳注『モンゴル秘史1-3—チンギス・カン物語—』(平凡社《東洋文庫》、1970-76年)、小澤重男『元朝秘史』(岩波書店《岩波新書》、1994年)、小澤重男訳『元朝秘史』(岩波書店《岩波文庫》、1997年)なども参照されたい。英語解題では、Igor de Rachewiltz, "Introduction", *The Secret History of the Mongols; A Mongolian Epic Chronicle of the Thirteenth Century* Vol. 1 (Leiden & Boston: Brill, 2006), pp. xxv-cxiii. が内外の最新研究成果を盛りこみ、詳しく論じている。

12) 村上正二訳注、前掲『モンゴル秘史1—チンギス・カン物語—』、1頁。

13) 森川哲雄『モンゴル年代記』(白帝社、2007年)、37-38頁。

説もある。モンゴル語による原典テキストは、17世紀末に書かれたモンゴル語年代記、ロブサンダンジン [bLo bzan bstan 'jin] の通称「アルタン・トブチ・ノヴァ／Altan tobči nova」のなかに、引用されていることをおもえば、その時点ではなんらかの形で伝存していたと考えられるが散逸した。

現存「元朝秘史」には、「十二巻本（十巻と続集二巻）」、「十五巻本」ふたつの系統のテキストが存在するが、両本とも「漢字音写によるモンゴル語原文、その原文の各語の右横に付されている語釈（これを傍訳と呼ぶ）、さらに段落ごとに付されている漢語訳（これを総訳と呼ぶ）」¹⁴⁾からなる。「元朝秘史」は「永楽大典」に収められ、明代出版書籍の総目録ともいべき、黄虞稷の「千頃堂書目」に著録されているところをみると、明代においては、その存在が忘れさられていた訳ではないが、世に普及することもなかった。清代に入り「元朝秘史」に注目したのが銭大昕であり、はじめ「永楽大典」所収十五巻本「元朝秘史」を書写し、ついで十二巻本「元朝秘史」も入手した。内藤湖南は、

銭大昕はこの書【元朝秘史】が蒙古開国時代の史料として有力なものであることを断言し、その元史に比して優れてゐる点を大分挙げてゐるが、この材料の珍らしい為、少し秘史を信じ過ぎた傾きもあり、元史に比べて秘史の詳しいところは尽く元史の粗漏に帰してゐるが、元史にもある考があつて簡略にしたところもあらうから、必ずしも銭氏の云ふ如くであるかは分らぬ。しかしともかくかかる貴重な史料に注意したのは彼の偉いところである。¹⁵⁾

と指摘する。

1847（道光二十七年）年、張穆は十五巻本「元朝秘史」の漢語訳（「総訳」）部分のみを、楊尚文が編輯する「連筠簞叢書」¹⁶⁾へ収め出版した。ロシア正教伝道団員のパラディイ [Аpx.

14) 小澤重男訳、前掲『元朝秘史』、「凡例」、同書（下）、3頁。

15) 内藤湖南、前掲「西北地理の学 一」、400頁。

16) 「連筠簞叢書」は、下記刊本十二種からなる。

韻補五卷 附録一卷 附韻補正一卷、宋・吳棫撰、清・顧炎武撰韻補正、道光二十八年刊

元朝秘史十五卷、元・闕名撰、道光二十七年刊

唐兩京城坊攷五卷、清・徐松撰、清・張穆校補、道光二十八年刊

長春真人西遊記二卷、元・李志常撰、道光二十七年刊

漢石例六卷、清・劉寶楠撰、道光二十九年刊

句股積積味較算術二卷、清・羅士琳撰、道光二十八年刊

橢圓術一卷、清・項名達撰、道光二十八年刊

鏡鏡診癡五卷、清・鄭復光撰、清・楊尚文統図、清・張穆編校、道光二十七年刊

癸巳存稿十五卷、清・俞正燮撰、道光二十九年序刊

群書治要五十卷、唐・魏徵等奉敕輯、道光二十七年刊

湖北金石詩一卷、清・嚴觀撰、道光二十八年刊

Палладий] は、1866年に、この連筠篔叢書本の漢語「総訳」部分をロシア語に重訳して、「チンギス・ハーンに関する古いモンゴルの物語」¹⁷⁾の題名で出版した。さらに1894(光緒二十年)、連筠篔叢書所収の十五巻本「元朝秘史」漢語総訳部分は、張穆の「蒙古遊牧記」などととも、上海の復古書局から石印本として刊行されている。岩村忍は、「元朝秘史」の「本当の価値をはじめて見出した」人物をパラディイとするが¹⁸⁾、このような評価は正確ではない。史料的な「価値をはじめて見出した」のは錢大昕で、漢語「総訳」を抽出出版して、内容を世に広めたのは張穆であり、それをヨーロッパへ伝えたのがパラディイといえる。さらに漢語音訳された原モンゴル語テキストへ注目したのが、以下にみる那珂通世である。パラディイ訳についてみれば、発表の場が、北京でだされているロシア正教伝道団の雑誌上でロシア語による翻訳であったこと、当時のヨーロッパ「東洋学」の規模、そのなかでの「シナ学」、「モンゴル学」の地位なども考慮すると、はたして、どの程度、「元朝秘史」という文献の存在をヨーロッパ「東洋学」界へ知らせることができたのかは疑問である。パラディイは十五巻本「元朝秘史」鈔本をも入手し、本国へ送ったものの帰国途上で客死した¹⁹⁾。

IV. 那珂通世と近代日本における歴史教育の構図

では那珂通世は、なぜに「元朝秘史」に注目するに至ったか。まず明治時代初期、つまり当時の学術先進国であった西洋の近代学術教育体系が、国家レヴェルで本格的に受容されはじめた時代の、日本における歴史教育、とくに「東洋」の歴史がどのように教室で教えられたかに関して概観しなければならない。もともと「歴史」を記述すること、史書を編纂することは、古今東西、あらゆる地域で普遍的にみられる現象であった。ところが「東洋」諸国における「歴史」とは、政治や文芸と区別されず一体化したものであった。つまり「哲史文」が明確に分かたれていない。これに対して、近代西欧において成立した科学の一分野としての「歴史学」とは、哲学、文学とは明確に切り離し、史料に対する実証的な分析のうえで、ヨーロッパ文明の発展を考察することに命題が置かれていた。

明治期日本の教育制度は、変遷があるものの、初等・中等・高等教育の三段階で構成されて

落颯樓文稿四卷、清・沈垚撰、道光二十九年序刊

17) Арх. Палладий, "Старинное монгольское сказание о Чинги-хане. Предисловие", *Труды членов Российской духовной миссии в Пекине*, Том IV (1866), стр. 3-258.

18) 岩村忍『元朝秘史』(中央公論社《中公新書》、1963年)、5頁。

19) ちなみに「元朝秘史」は、十二巻本であれ十五巻本であれ、中国以外の地域に所蔵される鈔本原本が、影印出版されることはなかった。唯一の例外が、このパラディイがロシアへ送付した十五巻本「元朝秘史」鈔本(現在は、サンクト・ペテルブルグ大学東洋学部図書室保管)で、1962年にモスクワにおいて刊行されている、ЮАНЬ-ЧАО БИ-ШИИ (*Секретная история монголов*), 15 цзюаней, Том 1, Текст (Москва: Издательство восточной литературы), 1962.である。

いた。明治初期の中等教育開始においては、実際問題として、教員養成および教科書作成が追いつかず、はじめ教科によっては英国の教科書をそのまま使っていた。ただ同時に、「和漢文」の教育も重視されていた。つまり教育の基本目的は、近代科学を教えることにあったが、「国語文」教育に対しても慎重な配慮がおこなわれていた。さらに明治初期においては、江戸時代の延長として、「四書五経」に習熟すること、立派な「漢文」が書けることも、知識人の重要な要件でもあった。そのような中等教育で教えらるる「歴史」とは、「国史」、「万国史」、「支那史」からなっていた。ただし「国史」の教材は、はじめは頼山陽の「日本外史」、「皇朝史略」などであり、近代歴史学の意識にもとづき作成されたものではなかった。一方、「万国史」とは、西欧の教科書を翻案したものであり、西ヨーロッパを中心に一部、中東地域の歴史がふれられているに過ぎなかった。「支那史」とは歴史教育というよりも、漢文教育の一部であり、「十八史略」、「元明史略」などの漢籍を教材として用いていた。

おなじような傾向は高等教育にも現れている。1877年、日本における最初の大学、「東京大学」が創設されたが、法学部、理学部、文学部、医学部の四学部より構成され、教員ははじめほとんど外国人であり、英語で授業がおこなわれていた。文学部は「史学・哲学・政治学科」と「和漢文学科」からなったが、「和漢文学科」が設置された理由は、いわゆる「欧化」が進行して、「和漢文学」が衰亡する傾向を阻止する目的からであった。一方、「史学科」では、フランス史、英国史、英国憲法史、ギリシア・ローマ史などのヨーロッパ史を教えようとしたが、教授に人材をえられず廃止された。

「和漢文学科」は、1885年に「和文学科」と「漢文学科」に専門分科しているが、1886年に「東京大学」が「帝国大学」へと改組される時点まで、「漢文学」専攻の卒業生はわずかに2名で、教員の方も中村正直、島田重禮などの、いわゆる江戸時代以来の「漢学者」、つまり「漢文」で書かれた文芸を研究するひとたちで、近代的な「研究者」とはいえず、また「漢学」の研究対象には日本人が「漢文」で書いた文献もふくまれていた。一方、1887年に「帝国大学」では、ドイツ人ルードヴィッヒ・リース [Ludwig Riess] を教員として招聘して「史学科」が復活する。日本史に関する講義は、はじめ「和漢文学科」においておこなわれたが、ヨーロッパ史を教える「史学科」が成立すると、これに対峙する形で、1889年に「国史学科」が設置され、同時に「和文学科」は「国文科」、「漢文学科」は「漢学科」と名称が変更され、漢学科でも「漢文」だけではなく、漢語の授業が始まった。さらに1890年代になると、「漢学科」のなかに、「支那歴史」、「支那哲学」という名前の専攻課程が誕生する。「漢学科」は1904年まで存続するが、名称のうへではヨーロッパ「東洋学」の「シナ学/Sinology」に類似しているようにみえるが、由来は異なっていた。

このように1890年代までは、中等教育では「十八史略」などをもとに「支那史」が教えられ、高等教育においては、日本史（「国史」）とヨーロッパ史は教えられていたものの、中国史は「漢学」の一部として教えられていた。このような状態のなかで、重要な役割を演ずるのが那珂通

世であった。那珂は福沢諭吉が創設した慶応義塾で近代科学の一端を学び、ついで教育者として活動した。この時代の知識人、教育者として必須の条件でもあった「漢学」についても深い知識をもっていた。那珂は1886年から、中等学校用「支那史」教科書執筆を開始した。その動機に関して、那珂の慶応義塾の後輩で、那珂没後、「文学博士那珂通世伝」を発表した三宅米吉は、

此の頃君【那珂】の最も心力を傾注せしは支那史の編纂なりき。従来中等諸学校にては支那史の教科書として多く十八史略、元明史略、清史掣要等を用ひしが、是等の史籍は一面漢文学として一面支那史として尊重せられたるものなれども、之を欧米の歴史教科書に比すればその体裁大に異なり編纂の旨趣亦同じからず、歴史上肝要なる事項の選択に於て遺憾とする所少からざるなり。されば我が国中等学校用教科書として適切なる支那史の編修は当時最も必要とせし所なりき。我が国史も当時専ら国史略、皇朝史略、日本外史の類を教科書として用ひたりしかば、国史の改修も亦急務たりしが、君は特に支那史を択びて其の改修を企て、而して之を記するに漢文を以てし、以て十八史略等に代へんことを期したるなり。²⁰⁾

と説明している。かくて那珂は1888年から90年のあいだに、『支那通史』4巻5冊²¹⁾を出版した。

同書は、太古から金・南宋の滅亡までを言及した、漢文で書かれた中国通史である。冒頭において、中国の地理や「人種」について概論し、さらに東西交渉に関しては欧文歴史文献も利用し、最新の知識を用いて意欲的に「中国通史」を叙述しようとした点では画期的内容であり、かつ政治的事件の羅列ではなく政治社会制度にもふれていた。しかし堯・舜といった伝説上の古代帝王からはじまり、王朝交替史観で叙述されている点では、近代的歴史学の作品とはいえない。一方、当時の清朝治下中国においても、「十八史略」などを除けば、通史などは存在していなかった。那珂の『支那通史』は、漢文で書かれているがゆえに、新式学堂を建設しつつあった清朝中国にも受け入れられ、1899年、羅振玉により翻刻版が出版された。

那珂は1894年、嘉納治五郎高等師範学校校長が主宰した、中等学校教科内容を検討する会議において、歴史教育の内容に関し、「国史」、「東洋史」、「西洋史」に三区区分すべきという、画期的提案をおこなった。もっとも那珂の提案する「東洋史」とは、「支那を中心として東洋諸国の治乱興亡の大勢を説くもの」²²⁾であり、すでに「国史」つまり日本史という領域が確立し

20) 三宅米吉「文学博士那珂通世君伝」、文学博士三宅米吉著述集刊行会編『文学博士三宅米吉著述集』上巻（目黒書店、昭和4年）、295-296頁。

21) 那珂通世『支那通史』4巻5冊（中央堂、明治21-23年）。

22) 三宅米吉、前掲「文学博士那珂通世君伝」、303-304頁。

ているがゆえに、日本は地理的・文化的に「東洋」に属すものの、「東洋史」からは日本の歴史を除外することが前提となっていた。このように「東洋史」という概念を、はじめて公式に提唱したのは那珂通世であった。そして、ほどなく「東洋史学」という、その当時の世界には存在していなかった研究領域が、日本の学界で確立する。

V. 那珂通世と清朝学者との交友

那珂は1896年、帝国大学（翌97年に「東京帝国大学」と改称）文科大学講師となり、漢学科で「支那史」の講義を担当した。那珂が出版した『支那通史』は、ほぼ宋代までの歴史を叙述しており、かれはそのあとの時期に関する続巻を刊行しようとしていたが、那珂が直面した最大の障害とは執筆の基礎とすべき史料の問題であった。つまり宋の時代までは「正史」や「資治通鑑」などを素材に、比較的容易に「通史」を書くことはできた。もちろん那珂は「元史」を読んでいたものの、それは極めて杜撰であると考え、とくにモンゴル帝国勃興期に関する史料を求めた。那珂が『支那通史』続巻執筆へ向けて史料探索をはじめた時期は、中国では「宗室盛昱の門人」によって元朝史方面で成果がでていたときと重なる。

このようなとき、変法派官僚で北京から追放された文廷式が、1900年2月に来日した。文廷式は、日清両国で幅広い人脈をもつ実業家、白岩龍平²³⁾の尽力で、伊藤博文、大隈重信、近衛篤磨などの日本人政治家や、清国公使李盛鐸、孫文とも会見している。当時、大阪朝日新聞記者であった内藤湖南は、清国を訪問した折に文廷式と上海で面識をえていたが²⁴⁾、内藤を通じて文廷式は那珂通世に面会を申し入れた。『史学雑誌』彙報欄は、1900年3月17日における、ふたりのあいを以下のように伝えている、

過般来本邦来遊中の文廷式氏は、清国現時の政客として有名なるのみならず、同時にまた清国現代に於ける有数の歴史家にして、李文田、沈曾植の諸氏とともに、其名声頗る高し、この程会員那珂通世氏の東洋歴史に精通せるを聞知し、内藤虎次郎氏を介して、会見を求めしに、那珂氏も快く之を諾し、会員白鳥庫吉氏及び桑原隲蔵氏の両文学士と共に、去月十七日文廷式氏に面晤し、筆談殆んど半日、和林訪古図（一八九一年発見の突厥、回紇、蒙古等の古碑）及び景教流行中国碑（明の天啓五年の発掘）等について、彼此意見を戦はし、尚同氏帰国後も、同心呼応して、斯学の發達を図るべきことを約して、相別れた

23) 白岩龍平に関しては、中村義『白岩龍平日記：アジア主義実業家の生涯』（研文出版、1999年）を参照。文廷式が、この時期に来日したのは、「李鴻章の意を受けた御史楊崇伊の弾劾をうけ」、「革職され北京から追放され」、「一時、長沙、上海等に身をかくし」、ついで日本へ至ったとの事情があった。同書、98頁。

24) 内藤湖南は、そのはじめての清国旅行の際、1899年11月3日、上海で文廷式と会っている、「己亥鴻爪記略」『内藤湖南全集』第6巻（筑摩書房、昭和47年）、334頁。を参照。

り。²⁵⁾

文廷式の日本訪問時、内藤と那珂は、重要なことを文廷式から聞きだしていた。前述したように、元朝史関係重要史料として「元朝秘史」という名の本があることは、錢大昕による「元史」に関する考証などから日本人研究家は知っており、「連筠篔叢書」のなかで刊行された十五巻本「元朝秘史」漢語総訳部分、さらに1894年に刊行された、その石印縮小本は日本へ渡来していた。したがって内藤や那珂は「元朝秘史」とはいかなる文献か、その内容に関しては知っていた。だが漢語によるモンゴル語音写と傍訳もふくむ原本「元朝秘史」は当時の日本には存在せず、中国においても稀本であった。ところが文廷式は十二巻本の「元朝秘史」鈔本を所有していた。内藤によれば、

文廷式芸閣氏が前年来游するや余【内藤湖南】前に已に之を滬上に識るを以て交最も欵洽に日々相隨ひ筆を以て舌に代へ古今を商榷し語元史に及び芸閣其の蒙文元秘史を蔵せるを道ふ…【中略】…余因て其の帰る後鈔寄せられんことを求む且つ之を延て那珂通世白鳥庫吉、桑原隲蔵三氏を見せしむ三氏は方今東洋史に於て最も精深なる者なり那珂氏亦秘史蒙文を見んことを欲するの意を懇す。²⁶⁾

つまり、文廷式が「元朝秘史」鈔本を持っていることを最初に探知したのは内藤であり、内藤は文廷式と「今東洋史に於て最も精深なる」那珂、白鳥、桑原との会合を設定し、この席上で那珂も文廷式の所蔵する十二巻本「元朝秘史」鈔本の写しを入手したい、との意向を表明したのであった。この「元朝秘史」の件に限らず、のちの「満文老档」の「発見」などにもみられるように、内藤湖南という人物は史料に対して、一種の天才的嗅覚をもつ人物であった。

文廷式の来日と前後して、張之洞の命により「学制」調査のため陳毅も、1899年9月から半年、ついで1902年2月にも再来日し数ヶ月間、滞在していた。かれに関して、おなじく『史学雑誌』彙報欄は、

陳毅氏は、清国両湖書院の助教なり。其学統をとへば、即ち彼の經史兼通の大家たる錢大昕の学風を伝へたる李文田及び文廷式と、同時の講学契友たる梁鼎芬及び沈曾植に師事して、其最も長する所は歴史にあり。両湖総督張之洞氏の命を受けて本邦に來遊し、昨年九月より今年三月に至るまでの半年余、東京に滞在して、教育并に行政の状況視察に従事せる間に、我が評議員那珂通世君を訪ふて、会談すること数回に及び、大に其学問に感服

25) 「文廷式と会員との会談」『史学雑誌』第11編第4号（明治33年4月）、112-113頁。

26) 内藤虎次郎「蒙文元朝秘史」『史学雑誌』第13編第3号（明治35年3月）、79頁。

して帰国せし由。²⁷⁾

と伝えている。那珂は陳毅に対して「元代史料の我が国に乏しきことを以てし、氏の帰るに方り此の種の史籍の寄送を依頼」²⁸⁾した。帰国後、陳毅は那珂に宛て、翌1900年の「華歴四月三日」付けで、以下の書翰をしたためていた、

那珂先生史席、前在貴都、踵府晋謁、辱承大教、深用銘佩、旋因事忽促帰国、未獲暢聆緒論、曲尽愚衷、何歎如之、先生識達今古、学貫東西、窮乙部之閩輿、啓後学之顛蒙、洵押当代泰斗、毅帰国時、謁梁節庵師（名鼎芬、官翰林院編修、学問品行、博通正大、張之洞総督最深倚重、與李侍郎文田、沈刑部曾植、皆同時講学契友現掌教兩湖書院）、及沈子培師（名曾植）備述先生学行、俱不勝欽仰、以不獲識面為憾、『元聖武親征録』（何秋濤、張穆、李文田、沈曾植校）、『雙溪醉隱集』（李文田校本）、『元秘史注』（李文田著）各書、帰即面稟梁師、請代覓寄呈、梁師快諾之、即出所蔵『親征録』紅印及墨印本各一部、（紅印本、梁師祇一部、因喜供貴人之覽、故割愛也）、並杜元凱『春秋釈例』、朱子『読書法』、馮從吾『元儒攷略』、陳澧（梁師之師也、門下有名者最多）『漢儒通義』、張之洞総督『勸学篇』各様刊本、命毅分寄呈先生及貴国大学図書館、（呈大学図書館者、請先生転呈）、『雙溪集』『秘史注』、梁師所蔵、已盡贈戚友生徒、頃日寓函向龍太守鳳鏞（龍氏、梁師表弟、現官安徽知府、雙溪集、舊少傳本、近為梁師発見、囑龍氏刊行、元儒攷略、親征録、読書法、皆龍氏刊）、袁京卿昶、（現官總署章京、秘史注、彼所刊、外刊書、可備考證者甚多）、索取、約過一二月、即可統呈尊覽、龍袁二氏所刊書、祇贈同好、不肯出售、故各書坊無由獲購也、『雙溪集』、先生曾云、白鳥学士著『闕特勤碑銘攷』、以未見此書為憾、異時当多寄一部呈学士也、此碑、沈師及盛祭酒昱（史学甚精）皆有攷、如索得、当亦寄呈、李侍郎及沈師所著書、未刊者甚多、当陸續刊行以資互證、（李侍郎『元史地名攷』『蒙古源流事證』稿本尚存毅處）貴『史学雜誌』、白鳥学士所著『闕特勤碑銘攷』『契丹女直西夏文字攷』『弱水攷』等篇、毅皆獲読、深服精博、惟『朝鮮古代諸国名称攷』、僅於『雜誌』第六編十一号第七編一号見之、惜皆未見全本、又『匈奴及東胡諸族言語攷』、亦未獲読、毅於『雜誌』、間有未講全者、不知所欠学士著在何号中、望代覓寄読、白鳥学士著述、聞羅馬東洋学会深加算美、故亟思一読、『雜誌』又載坪井【九馬三】博士於東洋学会演説『嶺外代答』、毅臆揣、必及木蘭皮国一條、未知然否、博士帰朝後、異聞必多、望先生転述所聞、賜教以拓眼界、先生誼切同志図東洋史学之發達、所請諸件、当不吝也、…【以下、略】…。²⁹⁾

27) 「清人陳毅氏より那珂通世氏にあてたる書状」『史学雜誌』第11編第8号（明治33年8月）、121頁。

28) 三宅米吉、前掲「文学博士那珂通世君伝」、308頁。

29) 前掲「清人陳毅氏より那珂通世氏にあてたる書状」、121-122頁。引用文の「句点及書名につけたる『 』」は『史学雜誌』編集部が加えたもの。

さらに文末で、陳毅は「『親征録』、如蒙記入『史学雑誌』中大為光荣」と追記している。この時点、つまり1900年においては、日本では「東洋史学」という学問領域は、ようやく産声をあげたばかりで、唯一の大学である「帝国大学」においても、専任担当教員はいない。一方、陳毅は1873年生まれと伝えられるので、当時、20歳代なかばで、張之洞両湖総督の命により来日した、両湖書院の若い「助教」であったが、元朝史・辺疆史地に関心があり、関係研究者と交流をおこない、日本人の研究業績へ関心を払っていることは注目される。陳毅は、1902年にも再来日し、那珂通世との旧交を温めたが、帰国後、那珂に手紙を送っている。そのなかで、

那珂先生史席、新橋判袂倏逾二月、故人情重感何可忘、別後起居佳勝、道学日懋嘗如私祝、僕兩度東游、專為攷察教育、帰謁総督張【之洞】公、力陳国民教育当重之旨、…【中略】…、宋徐霆『黑韃事略』、已在江寧覓得、明嘉靖抄本、約二十餘頁、霆於元太宗時、親使蒙古、所記蒙古風俗等事、得諸親見、其親見成吉思汗墓在臚胸河側、尤可珍貴者也、頃已托人抄写、稍緩即寄呈也。閱貴国東京帝国大学一覽、…【中略】…、漢学科史学科、各科目所授講義目錄次序、能詳告我尤感、親征録刻成否、盼甚、見内藤湖南君社代致候、帰後已將貴国史学界況、函告沈子培師（現居北京）、炎威漸熾、望為道珍重、崑此敬請答聞。³⁰⁾

とするしている。

江戸期に日本へは多数の漢籍が渡来していたのは事実だが、一面では文献の集積内容には偏りがあった。また中国から書籍を輸入する専門業者も、このころ、やっと誕生しつつある段階で、いままで目にすることのできなかつた元朝史関係文献³¹⁾を贈られた那珂は大いに喜んだに違いない。もっとも『雙溪醉隱集』、『元秘史注』の二書は、上記1900年の陳より那珂宛書翰が書かれた時点では、陳も入手できていなかったが、『元秘史注』は、日本における最初の中国書専門書店である、東京の文求堂が北京で入手し、のちに白鳥庫吉とともに東京帝国大学の

30) 「陳毅氏より那珂博士への来信」『史学雑誌』第13編第7号（明治35年7月）、72頁。

31) 三宅米吉、前掲「文学博士那珂通世君伝」、308頁によると、陳毅は「帰国の後梁沈二氏と謀りて皇元聖武親征録（何秋濤、張穆、李文田、沈曾植校）、雙溪醉隱集、元儒攷略、元秘史李注補（李文田著）等を贈り来り、後又黑韃事略の抄本等を寄せ来れり」とあるが、この箇所について、三宅は前掲『史学雑誌』彙報欄所引の陳毅書翰にもとづいて書いたとおもわれる。ついで「是等の書は今皆東京高等師範学校図書館に収蔵せらる。雙溪醉隱集の表紙には陳氏蔵書印ありて番禺梁節庵師贈と記せり。又黑韃事略の表紙には清国陳毅抄贈と書したり」と紹介している。陳毅から贈与された書籍、あるいは後述する、内藤湖南が重抄し那珂へ送った「元朝秘史」をもふくめ、那珂蔵書は、かれの没後、東京高等師範学校図書館で保管されたが、第二次世界大戦後、東京教育大学附属図書館をへて、現在は筑波大学附属図書館に所蔵されている。「知服齋叢書」本「雙溪醉隱集」（ル345-12/10076859893~4）2冊には、「番禺梁節庵師贈」、「戊戌十二月二十日記於菱湖精舎」と墨書され、「那珂文庫」、「那珂」、「故教授文學博士那珂通世遺書」、「黄阡陳氏蔵書」などの印記がある。ただし「清国陳毅抄贈」の「黑韃事略」は所在を確認できない。

「東洋史」講座教授となる、市村瓚次郎が購入していた。

このようにして那珂をはじめとする、日本の学者は、それまで書名は知っていたものの、現物にふれることのなかった、元朝史関係文献を手にしはじめていた。那珂がはじめ最も注目したのは、「聖武親征録」であった。それは、洪鈞の『元史訳文證補』を通じて、ラシード・ウッディーン「集史」が「聖武親征録」とおなじ史料にもとづき書かれたとの説を知ったからであった。それゆえに「那珂博士は「皇元聖武親征録」を急に見たいと思はれた」³²⁾のであった。那珂が受け取った「皇元聖武親征録」とは、1894（光緒20）年の桐廬袁氏序の刊本「校正元親征録」³³⁾で、内藤湖南も1899年に上海で友人のジャーナリスト田岡嶺雲から同書を贈られ注目していた。那珂は白鳥らと相談し、何秋濤、李文田らによる注釈の誤りを訂正して、「聖武親征録」を『史学雑誌』で復刻しようと計画した³⁴⁾。この計画は那珂の生前には果たされることはなく、没後に遺稿集のなかで「校正増註元親征録」³⁵⁾として刊行された。だが1901年、「聖武親征録」の排印復刻本³⁶⁾が文求堂から出版され、さらに翌1902年には『元史訳文證補』も那珂の校訂により文求堂からだされている³⁷⁾。

VI. 那珂通世による「元朝秘史」研究

那珂は1899年に文廷式と東京で会ったとき、「元朝秘史」の写本を入手したいとの希望を伝えていた。ところが文廷式の帰国直後に、義和団事件が勃発し、文廷式と日本人の連絡は途絶した。だが1901年の末、白岩龍平が上海から帰国する際に、文廷式は自分が所蔵する十二巻本「元朝秘史」鈔本の写しを内藤に届けるように頼んだ³⁸⁾。なぜ文廷式が十二巻本「元朝秘史」鈔本を所有するに至ったかに関して、内藤に贈った写本の冒頭につきのようになっている³⁹⁾、

此書為錢辛楣先生藏本、後歸張石洲、展轉歸宗室伯義祭酒【盛昱】、余於乙酉【1885年】冬借得、與順德李侍郎各録写一部、於是海内始有三部、其中部落之名、同功之將帥、漢文刊落者太多、得此可補其闕、又元時蒙文今無解者、故元碑多不可読、若用此書、合陳元靚

32) 内藤湖南「西北地理の学 二」、前掲『内藤湖南全集、第11巻：支那史学史』、413頁。

33) 本書も筑波大学附属図書館に所蔵されている（ヨ636-15/10076748997）。「故教授文學博士那珂通世遺書」、「那珂」の印記あり。

34) 「皇元聖武親征録の翻刻」『史学雑誌』第11編第8号（明治33年8月）、123-124頁。

35) 故那珂博士功績紀念会編『那珂通世遺書』（大日本図書、大正4年）。

36) 何秋濤校『校正元聖武親征録』（文求堂、明治34年）。

37) 洪鈞撰、那珂通世校訂『元史訳文證補』（文求堂、明治35年）。

38) 白岩龍平の日記によれば、1902年2月18日午後、東京で白岩は内藤に会っている。中村義、前掲『白岩龍平日記：アジア主義実業家の生涯』、425頁を参照。

39) 内藤虎次郎、前掲「蒙文元朝秘史」、80頁、なお内藤へ贈った写本冒頭に文廷式がしるした識語は、三宅米吉、前掲「文学博士那珂通世君伝」、312頁にも収録されている。

事林廣記、陶南村書史会要各書、互證音訳、或猶可得十之三四乎、日本内藤炳卿【湖南】熱精我邦經史、却特一代尤所留意、余故特鈔此冊奉寄、願與那珂通世君詳稽發明、轉以益我、不勝幸甚。

清光緒二十七年十二月朔日萍鄉文廷式記

内藤は受け取ったのち、「直に鈔胥を備ひて、一部を影写し、東京に送りこしたるは、今高等師範学校の蔵となれり。その後早稲田大学も、一部を影写して、その図書館に備へたり。是に於て我が海内にも、亦始めて三部ある事となれり」⁴⁰⁾という状態になった。内藤は1902年3月に発行された『史学雑誌』に「元朝秘史」を紹介する記事を寄せ、さらに大阪府立図書館での展覧会へも出品し公開している⁴¹⁾。内藤は、その『史学雑誌』寄稿文の最後を、

近年以来、元史訳文證補の渡来あり元聖武親征録は已に文求堂の重刊を経、又那珂氏の増註本にして成らば史学会より刊行せらるべく市村【瓚次郎】氏は秘史李注を蔵し而して今蒙文秘史【元朝秘史をさす】の渡来あり若し沈【曾植】氏の蒙古源流事證にして渡来し更に余が芸閣【文廷式】に求むる所元経世大典耶律鑄の雙溪醉隱集等にして渡来するに至らば元史研究の資料は益豊富を加へて其の記述する所發明する所庶幾くはかのドーソン【Constantin Mouradega d' Ohsson】、ホウォオルス【Henry H. Howorth】、ブレットシュナイデル【Emil Vasilievich Bretschneider】諸人と稍や頡頏するを得んか余偏に之を先輩諸氏に望み并せて以て自ら勗むと云ふ。⁴²⁾

と、元史研究発展への期待をのべて結んでいる。

那珂通世は、1902年に十二巻本「元朝秘史」鈔本を入手してのち、「其の蒙古文を正確に我が邦文に翻訳せんと志し、先蒙古語満洲語の辞書文法書等によりて蒙古語を研究し、漸く熟するに及で翻訳に着手し、又本書に関係ある支那及び西洋の諸書をも調査し、且訳し斯業に従事すること前後殆三年」⁴³⁾、つまり1905年までにほぼ、日本語訳注を終え、ついで1906年に入稿し

40) 那珂通世、前掲「成吉思汗實録の序論」、『成吉思汗實録』、26頁。内藤が文廷式から贈られた、文廷式所蔵鈔本からの写本（中国写本）は、現在、京都大学人文科学研究所に保管されている。ついで内藤が文廷式からの受贈本にもとづき日本で作成させた、その重写本（日本写本）は、筑波大学附属図書館と早稲田大学図書館に所蔵されている。さらに1907年に静嘉堂文庫が購入した、陸心源旧蔵「十萬卷樓」には十五巻本「元朝秘史」鈔本がふくまれており、今日も同文庫で保管されている。一方、文廷式が所蔵していた、十二巻本「元朝秘史」鈔本は、かれの没後、葉徳輝の所有するところとなり、那珂訳注『成吉思汗實録』が刊行された翌1908（光緒三十四）年に、長沙葉氏觀古堂蔵本（葉徳輝本）として出版された。白鳥庫吉による、後述する『音訳蒙文元朝秘史』の底本となったのは、この葉徳輝本である。

41) 「大阪図書館第一回図書展覧会」『史学雑誌』第15編第6号（明治37年6月）、114頁。

42) 内藤虎次郎、前掲「蒙文元朝秘史」、83頁。

43) 三宅米吉、前掲「文学博士那珂通世君伝」、313頁。

て、1907年1月には『成吉思汗實録』という書名で出版された。前述したように、この時点ではパラディイによる「元朝秘史」ロシア語訳がでていた。ただ、それは十五巻本「元朝秘史」の漢語「総訳」からの重訳であった。また李文田は、十二巻本「元朝秘史」鈔本を文廷式とともに所有してはいたが、『元秘史注』編集の段階では、それを入手しておらず、結果的に、漢語音写されたモンゴル語テキストを参照していない。

那珂通世の『成吉思汗實録』の学界史的意義とは、世界ではじめて、この「元朝秘史」原テキスト、つまり漢語音写されたモンゴル語テキストから翻訳・訳注をなしとげたことにある。那珂は、その生涯において、清国へは日露戦争の際、1905年に嘉納治五郎らと旅順へ赴き、また翌1906年、高等師範学校「生徒修学旅行監督」として「満洲」へ短期間、派遣されたにすぎず、一度もモンゴル地域へは足を踏み入れることがなかった。I. J. シュミットのモンゴル語文典でモンゴル語を独学し、その辞典を使いながら翻訳に挑んだ。

那珂をして、このような困難な作業へ取り組ませた動機とはなにか。それは、「元朝秘史」の奇妙な構成（つまりモンゴル語原文の漢字音写、「傍訳」、「総訳」）に由来するものであった。那珂は「連筠叢書」本、ないしは1894年刊石印縮小本を通じて、十五巻本「元朝秘史」の漢語「総訳」から、「元朝秘史」の内容は知っていた。しかし漢語「総訳」は漢文に熟達していた那珂にとっても特異な文体⁴⁴⁾で書かれていた。清末学者にとっても事情はおなじであり、それゆえに李文田は『元秘史注』を出版していた。

さらに文廷式の好意で十二巻本「元朝秘史」鈔本を手にして、漢語「総訳」は漢字音写から想像される、モンゴル語原文からの忠実な翻訳ではなく、簡略化された意識であることは、「傍訳」を参照すれば明らかであった。もしも漢語「総訳」が、モンゴル語原文からのかなり正確な翻訳と判断したならば、那珂はモンゴル語を習得し訳文に修正を加えるとしても、「親征録」とおなじ手法で、「校正増註元朝秘史」とでもいうべきものを漢文で出版したのではないかと想像される。さらに「元朝秘史」に「傍訳」と「総訳」が欠けていたのならば、那珂とても「元朝秘史」日本語訳はきわめて困難であったろう。しかし、あらたに漢字音写テキストにもとづき翻訳する以上、モンゴル語として読み、日本語へ訳出することが肝要と那珂は考えたに違いない。

上記の推定を裏づけることを、1905年10月24日付け、内藤湖南宛書翰において、那珂は言及している。その書翰で、那珂は訳注と「序論」がほぼ完成したことを報告し、前年1904年に亡くなった、「文廷式の墓にたむくるも近き内ならんと楽しみ居れり」と告げ、ついで、

44) この「元朝秘史」の「総訳」部分の特異な漢語文体をなんというべきか、金文京氏にお尋ねしたところ、「蒙文直訳体に近い白話体」で「蒙文直訳体は「元典章」や白話碑などに用いられるが、「元朝秘史」には直訳体特有の用語は少ししかなく、ざりとて小説や語録など一般の白話体とも異なり、また【漢語による「音訳・傍訳・総訳」がなされたのが】洪武という時代から、明代か元代かは微妙なところ」との御教示をえた。金文京氏に対して御礼申しあげたい。あわせてイゴール・ド・ラケヴィルツ、松川節両氏からも有益な示唆をいただいた。

只物足らぬ心地するは、和訳にして漢訳に非ざる事なり。しかし是は已むを得ざる事に、蒙文は阿勒泰語族に属し、我と文法殆ど同じければ、和訳なれば、ことばごとに直訳して増も減も無く訳せらるれども、漢文にてはそれは出来ず、蒙文の真味（殊に此書中に甚だ多き蒙古の韻文の面白みなど）を失ふ事となる。僕も最初は先づ和文に訳し、後に漢文に訳せんと思ひしが、今は漢訳する事を断念し、只序論だけは漢文を添へんかと考え居れり。僕の此の苦心と此の愉快とは、世間に語るべき人只の一人もなき故に、かく管々しく申上ぐるなり。⁴⁵⁾

とのべている。那珂の代表作、『支那通史』が漢文で書かれ、その続編執筆のため「元朝秘史」へ取り組んでいたこと、また当時の日本における近代学術、とくに歴史学をふくむ人文科学では、日本語文語体文章によって学問が表現されることへ努力が注がれていたことを考えあわせるとき、那珂は「東洋史学」の提唱者ではあったが、かれの立場は「漢学者」に近いもの、あるいは「漢学者」と「東洋史学者」の過渡期的存在であったことが確認できる。

那珂はみずからの訳注書書名を、『成吉思汗實録』と名づけたのはなぜか。那珂は同書「序論」において、「初は蒙古古事記と名づけんか」と考えたとしるしている。だが、

然れども此書【元朝秘史】は、又古事記と異なる処あり。古事記は、千余年の間に渉れる古伝を今より千二百年前に書ける者なり。此書は、百余年の間の耳に聞き目に見たる事を今より六百六十余年前に書ける者なり。古事記は過半神話なれども、此書は殆ど皆実伝なり、故に此書は、上古史に非ずして、近世史なり。古の事を追叙せる歴史に非ずして、当時の事を直叙せる記録なり。之を我が古事記に擬ふるは、僭に非ざれば妄なり。その体裁最も実録の書に近きが故に、今は古事記の名を罷めて、実録の名を取れり。

実録は唐宋以来世毎に必ず撰述せらる。天子崩ずれば、嗣帝の世には大抵先朝の実録の撰修に取掛れり。故に実録は、史書の中にて、事実の起れる時代に最も近き記録なり。此書の正集は太祖の時に成り、続集は太宗の時に成りたれば、嗣帝の世に撰修せるに非ずして、今帝の事績を今帝の世に撰修せるなり。実録よりは寧起居注に近し。されども起居注は、天子の言動を史官の即時に記録する者なり。蒙古には固より起居注官とても無く、語部などの語れることを後に至りて書き集めたる者なるべければ、起居注には非ずして、猶実録なり。⁴⁶⁾

このように「元朝秘史」を、チンギス・ハーンに関する一種のモンゴル語による「実録」と考えたからにほかならない。ここに那珂の「元朝秘史」に対する、史料評価も語られている。

45) 三宅米吉、前掲「文学博士那珂通世君伝」、314頁。

46) 那珂通世、前掲「成吉思汗實録の序論」、『成吉思汗實録』、58-60頁。

今日では「元朝秘史」は「史書」というよりは、一種の「歴史文学」と理解されており、その意味では、那珂の史料理解は根本的に間違っていた。しかし那珂が「元朝秘史」を「実録」の一種ととらえたのは、「東洋史学」という、世界に存在していなかった研究領域ができつつあった日本においては、無理からぬ一面もあった。

いうまでもなく、「実録」とは、東アジア諸国に共通してみられる、皇帝、国王の事績に関する、編年体の記録である。この時代のヨーロッパの「東洋学者」は歴史学者ではない。したがって、史料としての「実録」の存在にほとんど関心をしめしていない。ところが那珂たち、日本の研究者は、日本にも「実録」編纂の伝統があるゆえに、王朝史に関する最も重要な史料として「実録」をとらえていた。那珂が「元朝秘史」に取り組んでいた時期、内藤湖南は中国東北へ赴き、奉天で「満文老档」をみいだした。ふたりのあいだで手紙のやりとりがあり、その過程で前掲1905年10月24日付け、内藤湖南宛書翰が書かれたが、那珂は「満文老档」も「実録」の一種と考え、それを「発見」した内藤を褒め称えていた⁴⁷⁾。ちなみに、清朝、朝鮮王朝、そしてヴェトナムの「実録」、つまり東アジア諸国の「実録」が研究史料として出版される事業には、すべて日本人研究者が関わっている。さらに日本では、現在でも宮内庁によって「実録」は編纂されてさえいる。つまり日本人は「東アジア文化圏」に属するがゆえに、「実録」の意義を非常に高く評価していたのである⁴⁸⁾。

那珂は『成吉思汗實録』を出版してからほどなく亡くなった。那珂の「元朝秘史」は典雅な文語体日本語で翻訳されていることで名高い。世界ではじめての、漢語音写モンゴル語テキストからの翻訳であったが、ヨーロッパの学界では、その偉業は余り評価されることがなかった。それは、刊行当時のヨーロッパの「モンゴル学者」のなかに、日本語を理解するものが全くいなかったこと、またヨーロッパの「東洋学者」であれば試みたであろう、漢語で音写されたモンゴル語テキストを、ローマ字転写して、原モンゴル語テキストを復元する作業をおこなわなかったことによる⁴⁹⁾。すでに指摘したように、那珂は「東洋史学」の提唱者ではあったものの、かれの学問の性格は「漢学者」に近く、いわんやヨーロッパ的「東洋学者」ではなく、モンゴル語原典テキストのローマ字転写による復元の必要性などはおもしろなかった。この那珂が手がけなかった文献学的作業をおこなったのが、ヨーロッパで「東洋学」の方法を学び、日本の大学で、いや世界の大学で最初の「東洋史学」教授となった白鳥庫吉であった⁵⁰⁾。

47) 三宅米吉、前掲「文学博士那珂通世君伝」、313-315頁。

48) 拙稿「日本人与《実録》」、中国第一歴史档案馆編『明清档案与歴史研究論文集—慶祝中国第一歴史档案馆成立70周年』上冊（北京：中国友誼出版公司、2000年4月）、305-321頁、を参照。

49) Erich Haenisch, *Die geheime Geschichte der Mongolen* (Leipzig: Otto Harrassowitz, 1941), S.XIX.

50) 白鳥庫吉『音訳蒙文元朝秘史』（東洋文庫《東洋文庫叢刊第8》、昭和17年）。

Ⅶ. 教育官僚から「辺疆」実務家へ：陳毅の後半生

19世紀の最末年、清朝の若き教育官僚で、「宗室盛昱の門人」の学統に連なり、「西北史地の学」に詳しい陳毅が来日し、那珂通世ら草創期日本の東洋史学者と交流をもち、かれを介して、元朝史関係文献が日本へ伝えられたことに関しては、さきにふれた。この陳毅の日本学界との交流、そして貢献は、今日まったく忘れ去られている。だが陳毅は民国に入り、モンゴル問題に関与したことにより、その名が記憶されている。

陳毅は日本から帰国後、学部参事、図書館纂修などをへて、民国になると、北京政府大総統秘書、蒙蔵総務庁総辦に起用された。清朝が崩壊すると、ハルハ地方のモンゴル人は独立を宣言し、ボグド・ハーン政権を樹立した。清朝時代のモンゴルに対する支配権をそのまま受け継ごうとする袁世凱政権にとって、「モンゴル独立問題」は重要な外交課題となったが、その対処過程で陳毅の元朝史、ひいてはモンゴルに関する知識は北京政府により活用されることとなる。

1914年から15年にかけて、キャフタで関係三国、つまりボグド・ハーン政権、北京政権、ロシア帝国政府による会議が開催されて、中華民国宗主权下での、外モンゴルに限定した、ボグド・ハーン政権による高度自治を承認することで、「モンゴル独立問題」は収拾される。このキャフタ会議に、陳毅は北京政府代表団の一員として参加している。ちなみにロシア帝国臣民であったブリヤート系モンゴル人で、モンゴル族ではじめて近代的な意味での「モンゴル学者」となった、ジャムツァラーノ [Ц. Ж. Жамцарано] もこの会議に出席し、モンゴル側代表団への通訳として活躍している。陳毅の北京側代表団内における序列は、首席・陳籙（パリ大学で国際法を学んだ外交官僚、後年、汪精衛政権で外務大臣をつとめ、暗殺される）、次席・畢桂芳（清朝時代の名は桂芳、旗人出身、清朝政権下では理藩院官僚）につぐ第三位である。

キャフタ協定締結後、清朝時代の「庫倫辦事大臣」職は、「庫倫辦事大員」となり、役割も北京政権の外モンゴル駐在代表（high commissioner）へと変わったが、北京政権は「都護使」の名称を用いた。陳毅は「副都護使兼佐理員」としてオリアスタイに駐在したのち、陳籙の辞職を受けて、1917年8月、第二代庫倫辦事大員へ発令された。だがロシア革命の勃発、ロシア帝国崩壊によって、ボグド・ハーン政権はその後盾を失い、北京政府は外モンゴルへの影響力回復を策した。そのような北京政権による政策の実施を庫倫現地で指揮したのが、陳毅であった⁵¹⁾。

51) ロシア革命勃発以降の時期における、北京政権による対外モンゴル政策、および陳毅の活動に関しては、Sow-Theng Leong, *Sino-Soviet Diplomatic Relations, 1917-1926* (Honolulu: University Press of Hawaii, 1976)。および笠原十九司「日中軍事協定と北京政府の「外蒙自治取消」—ロシア革命がもたらした東アジア世界の変動の一側面—」『歴史学研究』第515号（1983年3月）、18-33、49頁を参照されたい。

陳毅はボグド・ハーン政権内のモンゴル王侯層に働きかけて、形式的には「高度自治」を自発的に解消させることをめざしたが、段祺瑞が率いる北京政権は徐澍錚を送り込み、19年11月には一方的に自治を撤廃させ、徐澍錚との対立のなかで陳毅は辞職した。だが安福系の没落とともに徐澍錚も失脚し、陳毅は再び地位に復するものの、モンゴル人の北京軍閥政権への反感は高まっていた。一方、シベリア内戦で劣勢に立たされた、反革命軍のウンゲルン・シュテルンベルグ〔Роман Федорович Фон Унгерн-Штернберг〕は、外モンゴルを反革命の拠点とすべく、外モンゴルへ侵入し、ボグド・ハーン政府を復活させる。これにより陳毅は追放された。

ウンゲルン・シュテルンベルグは外モンゴルを押さえたものの、かれのあまりに残虐な行動はモンゴル人に恐慌をまきおこした。モンゴル人のあいだでは、コミンテルンの指導によりモンゴル人民党が結成され、その要請にもとづき、日本軍および北京政権あるいは張作霖軍閥側からの反撃がないことを確認したうえで、ソヴィエト赤軍と極東共和国軍は「外モンゴル高度自治回復」を名目として軍事介入をおこない、いわゆる「モンゴル人民革命」が勃発した。陳毅についてみれば、キャフタ会議および庫倫辦事大員時期までは、かれの知識と能力は活用されたものの、結局は時代の波に翻弄された人生を送ったといわざるをえない。事実、モンゴル追放以降のかれの足跡は不明である。

キャフタ会議は、清朝崩壊以降のモンゴルに関する地域秩序を関係当事国により協議したもので、キャフタ協定で承認されたボグド・ハーン政権の高度自治区域が、今日の独立国家、モンゴル国の領土の起源となっている。また清朝崩壊後、結果的に、旧清朝領域内において国民国家形成に成功したのは、外モンゴルのモンゴル人のみである。キャフタ会議と同時期に、チベット問題では、シムラで英国、ダライ・ラマ政権、北京政権による会談が開催されたが、結局、三者間での合意形成に至らず、今日まで「チベット問題」は続いている。なぜキャフタ会議は合意形成に成功し、シムラ会議は決裂したか。その要因としては、モンゴル問題ではロシア帝国の周到な外交根回しとモンゴル側の独立への強い意志があった反面、チベット問題に関しては、英国は根回しを欠き、またチベット側、北京政権側も国際感覚に欠けていたのは事実である。多国間外交交渉においては、協議者間で状況への的確な共通理解と合意を形成しようとする意志の存在が、成功、失敗への決め手となろう。

キャフタ会議についてみれば、北京政権は、モンゴル問題に知識をもち、あるいは現地の情勢を理解しようとする意志のある人材を結果的に代表として送り込んだことも、いままで注目されることはなかったが、合意形成成功への要因のひとつといえる。モンゴル問題の専門家というべき、陳毅を登用したことにそのことは現れているが、陳毅もモンゴル駐在中、たとえばオルホン碑文に関心をしめし、モンゴル史書（「エルデニイン・エリヘ／Erdeni-yin erike」と想像されるが）の翻訳をおこなうなど、モンゴルの歴史に興味をもち、さらに独立宣言当時のモンゴル情勢を質している。今日においては史料的な価値の高い、キャフタ会議およびモン

ゴル駐在時期の日記⁵²⁾を残していることでも、この事実は確認できる。だが陳毅のモンゴル駐在時代の活動をみれば、胎動するモンゴルのナショナリズムやモンゴル人の心情を理解していた訳ではなく、あくまでも「辺疆」官僚としての枠組をでるものではなかった。そもそも陳毅が修めた、「辺疆史地」研究の学統とは、清朝による「辺疆」経営のための、官僚学者による「学問」であったからである。

VIII. 終わりに

現在の中国において、その元朝史・モンゴル史研究の歩みを説くとき、はじまりを錢大昕におき、ついで張穆、何秋濤、文廷式、李文田、沈曾植、そして洪鈞などの清朝文人官僚学者をあげ、ついで王国維そして陳垣のあとに、本格的な近代的元朝史家の誕生として、具体的には、翁独健、邵循正、韓儒林の三人をあげる。ただし第二次世界大戦後、台湾へ逃れたために言及されることはないが、姚從吾や、大陸に残ったものの元朝史研究から遠ざかった蒙思明もこの三人に加えられるべき人物であろう。この五人には、共通するところがある、いずれも修学期に欧米へ留学していることである。さらに中国歴史学界のなかでは元朝史研究の雰囲気は、ほかの王朝史研究とは、いささか異なっていることを感ずることが多い。それは、元朝史研究が、漢語史料に対する研究のみでは足りず、しかもヨーロッパそして日本における研究業績を参照せざるをえなかった、という状況に起因する。この傾向は、すでに洪鈞の時代に現れていた。

一方、日本において「東洋史」という、当時の世界においては存在しなかった学問分野が誕生するのは、19世紀から20世紀への交替期であり、それを主唱したのは那珂通世であった。那珂の構想する「東洋史」とは、それまでの漢文教育の一部ともいえるべき「支那史」より、幅広い東アジア圏を包括する内容のものであった。那珂自身は、それまでの「十八史略」に代わる「支那史」の中等学校教科書を発表していたが、記述は宋代までで終わっており、元朝期以降は執筆が中断していた。なによりも基礎となるべき史料が不足していたからである。那珂にとって幸運であったのは、清朝時代に錢大昕をはじめとする、近代的な歴史学者ではないが、伝統的文人官僚により「西北史地の学」が発展していたことである。那珂はそれらの業績から「元朝秘史」、「聖武親征録」などの存在を知り、また洪鈞の著作からドーソンらヨーロッパ「東洋学者」の業績も知った。近代日本におけるモンゴル史・元朝史研究は、実は清朝学者からの情報を追うことで開始された。

転回点は、十二巻本「元朝秘史」鈔本を所有する文廷式や、元史研究に関心をもつ陳毅が日本を訪問し、那珂たちと交流が始まったことである。那珂ら日本人学者は連筠蓀叢書所収「元

52) 拙稿「陳崇祖『外蒙近世史』の史料的价值—ボグド・ハーン制モンゴル国時代の若干の中国側史料の考察—」『史学雑誌』第85編第8号(1976年8月)、51-68頁、を参照。

朝秘史」を通じて、「元朝秘史」の内容は知っていた。ただ那珂が非凡なところは、文廷式から十二巻本「元朝秘史」を提供されて、モンゴル語漢字音写テキストからの翻訳へ取り組んだことであり、独学でモンゴル語を学び日本語訳注を完成させた。これは同時期の清朝学者にはない学問姿勢でもあった。だが那珂は、「東洋史学」の提唱者であったものの、その本質は教育者、「漢学者」であって、ヨーロッパ流「東洋学」で要求されるような、モンゴル語原典テキストの復元などの必要性を理解していなかった。

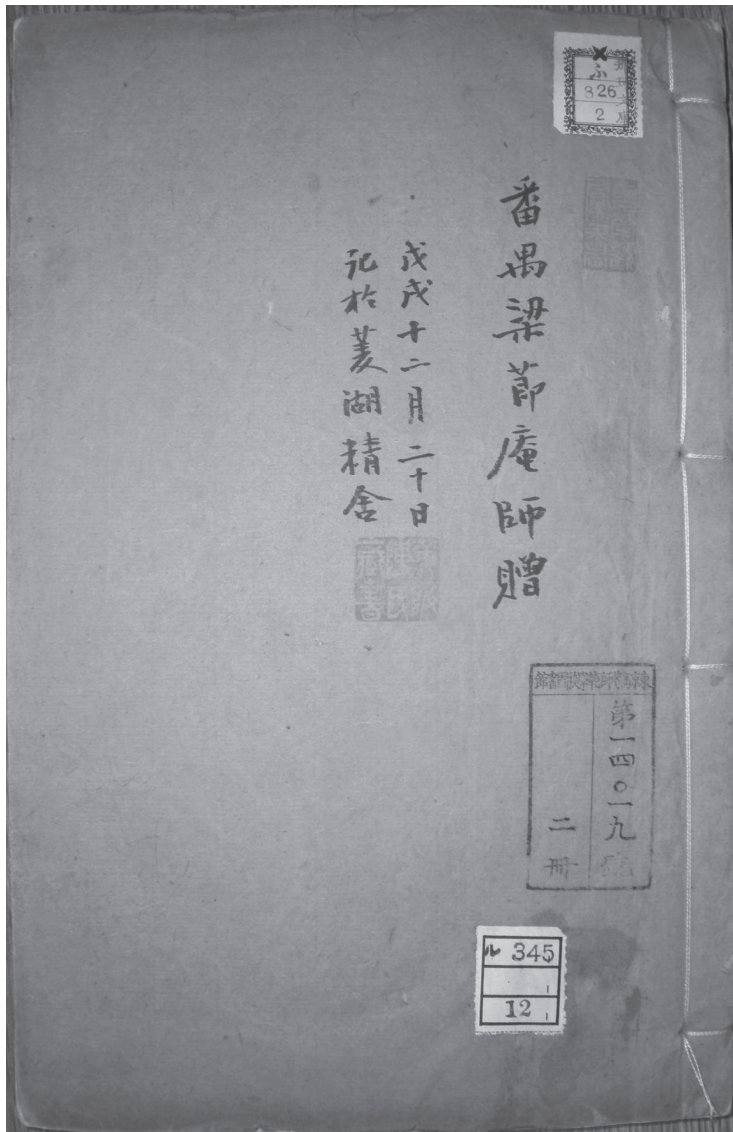
1904年から1907年にかけて、つまり那珂が「元朝秘史」に取り組んでいたころ、東京と京都の帝国大学には、「東洋史学」の教授がうまれた。東京では白鳥庫吉、市村瓚次郎、京都では内藤湖南、桑原隲蔵が前後して教授となる。白鳥庫吉、内藤湖南、桑原隲蔵は前述したように、文廷式と面会した人物であり、市村瓚次郎は逸早く『元秘史注』を入手していた。那珂亡きあと、元朝史、モンゴル帝国史研究は白鳥や羽田亨、那珂の弟子ともいうべき箭内互、松井等などにより推進され、日本の「東洋史学」の中心的な課題となったが、歴史地理研究および制度史に研究の重点がおかれていた。「元朝秘史」モンゴル語原典テキストの復元は、那珂通世による『成吉思汗實録』が刊行されてから大分のちに、ヨーロッパで「東洋学」を学んだ、白鳥庫吉によっておこなわれた。

ヨーロッパ人「東洋学者」によるモンゴル帝国史研究は、多かれ少なかれ、ドーソンの視点、つまりにチンギス・ハーンとその後継者たちを、残忍な文明の破壊者にとらえる見方に影響を受けていた。那珂通世訳注「元朝秘史」がだされてから間をおかず、田中萃一郎訳ドーソン著『モンゴル帝国史』が刊行されているにもかかわらず、那珂にはじまる日本のモンゴル史・元朝史研究では、今日に至るまで、そのような観点は希薄である。おそらくは「元朝秘史」、「聖武親征録」、「黑韃事略」などの史料を媒介として研究が開始されたことと無縁ではあるまい。那珂は「元史」が杜撰と考えたゆえに、あらたな元史史料を求めた。おなじような考慮から、中国では柯劭忞が「新元史」を撰したが、中華民国大総統、徐世昌は歴代「正史」のなかにこれを加え、東京帝国大学は文学博士号を授与した。その学位審査をおこなったのは、市村瓚次郎と箭内互であった。大正・民国初期においても、元史研究の面では、中国歴史家と日本人「東洋史」学者とのあいだでは交流は続いていたのである。

一方、ヨーロッパ・北米「東洋学」のあいだで、元朝史そのものに対する研究が本格的に進むのは、1940年代以降のことであり、クリーヴス [Francis W. Cleaves]、ヘルベルト・フランケ [Herbert Franke]、アムビス [Louis Hambis]、ラチネフスキー [Paul Ratchnevsky]、シュルマン [Herbert Franz Schurmann]、ド・ラケヴィルツ [Igor de Rachewiltz] などは代表的学者である。かれらは日本や中国人研究者の成果から学ぶところが多い。本シンポジウムにおいて検証しようとしたように、東洋学・アジア研究にあっても学术交流は、常に一方的な情報の伝達で終わることはなく、成果は相手にも還流する。その接触のなかから、国際的な基準、つまりこの問題を論ずる場合は、この程度の知識は最低限、備えていないと研究業績と

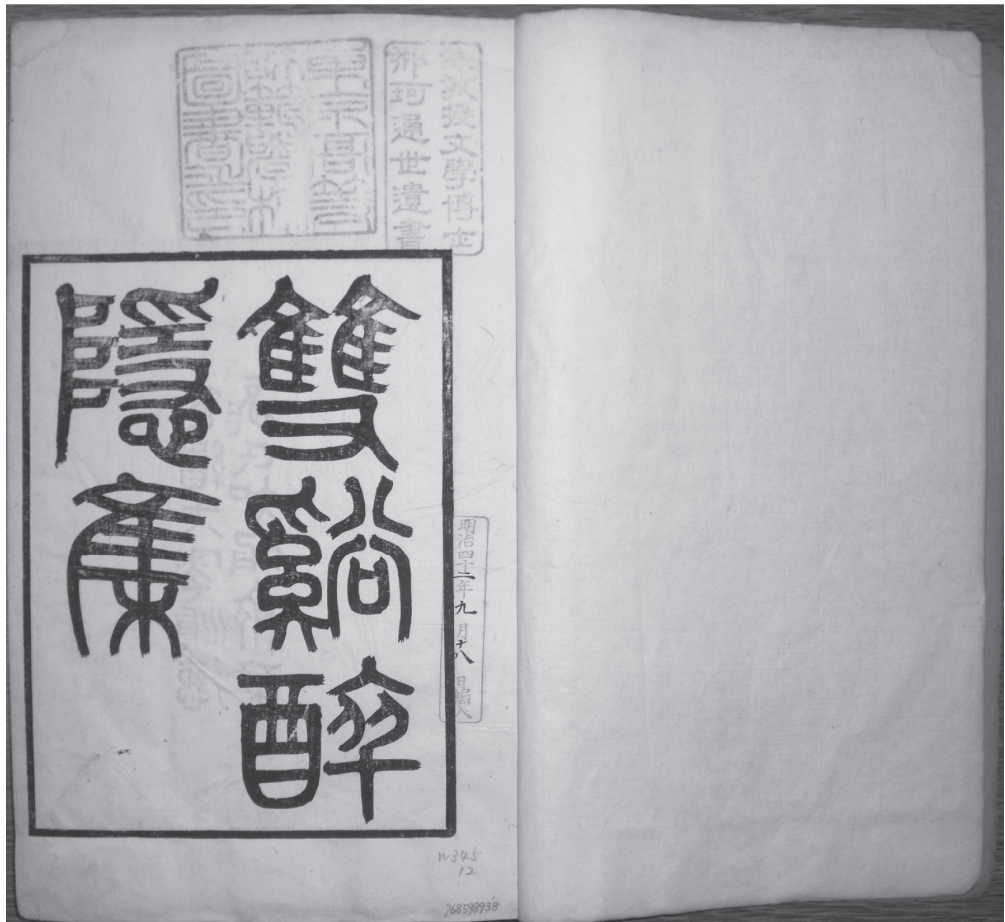
はならないというスタンダードが形成されることへ注目すべきであろう。元朝史研究に限ってみれば、まさに基準は、国際的な交流のなかで形成されてきたといえよう。

筑波大学附属図書館に所蔵される、陳毅から那珂通世へ贈られた「知服齋叢書」本「雙溪醉隱集」(ル345-12/10076859893~4)



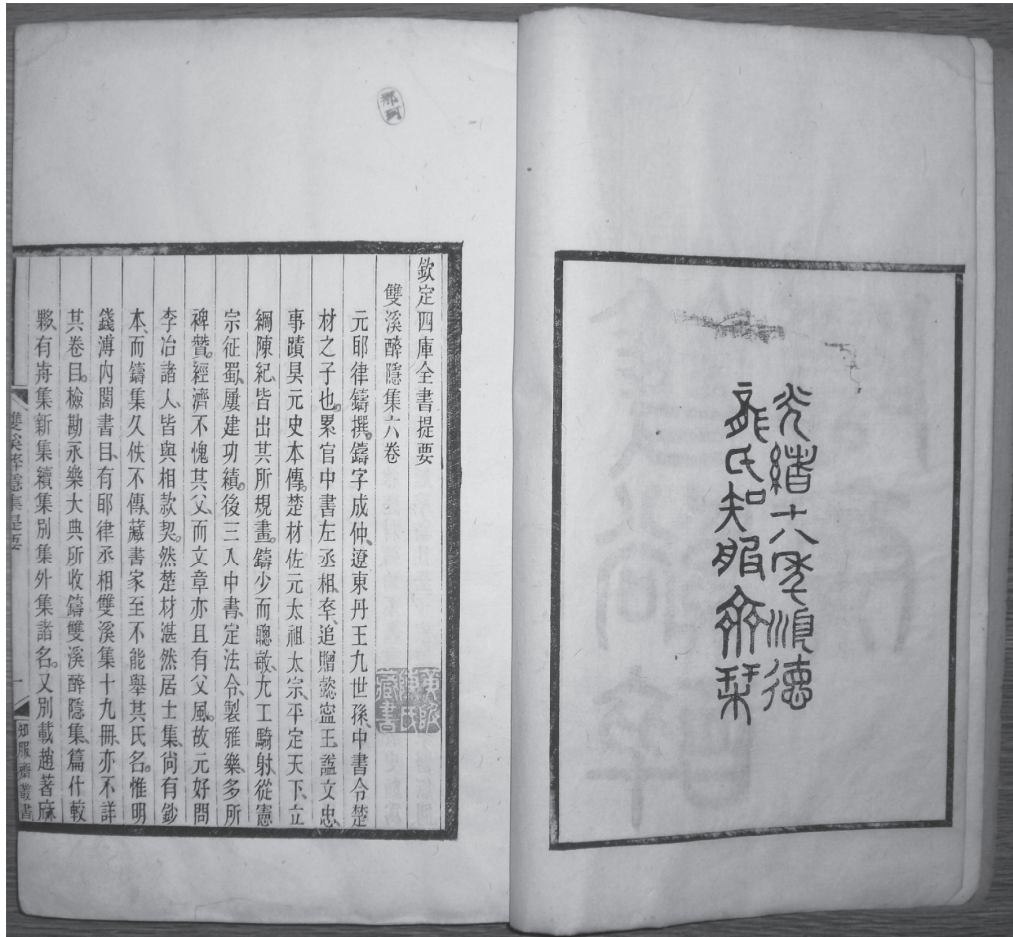
図版1 同書表紙

「番禺梁節庵師贈」、「戊戌十二月二十日記於菱湖精舍」と陳毅により墨書され、「黄阡陳氏藏書」の蔵書印がおされている。



図版 2 同書首葉

「故教授文学博士那珂通世遺書」、「東京高等師範学校図書之印」が押印され、明治42年9月18日に受入られたことが分かる。



図版3 同書第一葉

「那珂」、「黄阡陳氏藏書」の印記がみられる。「那珂」の印は、那珂が生前に押印していたのであろう。

本書図版を掲載するに当たっては、筑波大学の楠木賢道氏から多大の御尽力をうけ、同大学附属図書館より掲載許可をいただいた。御配慮へ厚く御礼申しあげたい。